

やまたらけ

YAMADARAKE

APRIL
No. 10
2005

古文書からみる 早川の暮らし

むかしむかし、その昔、早川流域の村々は、「早川入り」と呼ばれていました。でも地元の人には、この言葉にあまり良い印象を持っていません。「入り」というのは、入り組んだ谷地形のことで、「早川入り」という言葉には、へんぴな所というニュアンスが付きまとっているからなんです。

昔々の早川入り、といって思い浮かべるのは、田んぼが少なく米が取れないから貧しい。交通の便が悪いから、他の地域との行き来も少なく、ひっそり暮らしている。こんなイメージではないでしょうか。

今回はそんな「早川入り」のイメージを壊してみようと、古文書を取り上げます。古文書の、独特の崩し字と難解な言い回しは、何かの暗号のようにも感じられます。でも、その暗号を解読すると、先人たちの暮らしが浮かび上がってくるのです。

イメージというペールを剥いで、さて、どんな姿が見えてくるでしょうか。

伊奈街道開さく願と同絵図

明治8年、早川往還を延長して南アルプスを越え、長野県飯田、高遠に新道を開さくするという構想が、両県の関係市町村共同で進められた。雁皮、桑皮などの林産物と、富士川舟運の塩、魚などの海産物の交易を図ることが目的であった。

紙漉の村々との攻防の巻

早川の近くには、市川大門と西島という紙の大産地が二つもある。その需要で、早川入りの村々をはじめとした富士川兩岸の地域では、コウゾ・ミツマタ栽培が盛んだった。売る方は高く売りたいが、買う方は安く買いたい。そんなわけで紙漉の両村は、コウゾ・ミツマタを高値で買い取る他国（他県）へ売り出しをさせないよう、寛政年間（一八〇〇年頃）に役所に願い出た。

文化十（一八一三）年には、市川大門と西島の紙漉職人が役所に申し立てて、鰍沢の河岸に着いたコウゾ・ミツマタの継ぎ送りの荷物を、出荷した産地に断りなく差し止めてしまった。

これに怒ったコウゾ・ミツマタ産地の巨摩郡・八代郡八十三ヶ村一同は、文化十一（一八一四）年、十島村（現・南部町十島）長百姓九兵衛と保村役人後見秀八を総代にして、他国売り出しの許可を求める駕籠訴^{（注）}を起こす。差し出した文面には、役人たちが紙漉をひいきしている、それはおかしい、という指摘もある。

結局、他国売り出しの許可は出されなかったのだが、この一件からは、買い手の言いなりに甘んじることなく対等な立場に立とうと奮闘する、原材料を生産している人々の姿が見える。不当な扱いには断固抗議もする熱い人々だったのだ。

【参照史料】

『山梨県史』資料編十一 近世四



（注）駕籠訴とは、江戸の老中などが移動する時を見計らって駕籠の前に飛び出す直訴で、御法度とされていた。この時は老中松平信明への直訴である。

斎藤家文書



木馬（昭和初期）



早川発 全国レベルの逸品の巻

近世の早川入りからは、誇るべき名産品がいくつも送り出されている。

まずは材木。「甲斐国志」という書物には、早川入りの木材の品質の良さは他の山の及ばない所で、中でも雨畑は最も良材が多かったと書かれている。

町内にはそういった材木を扱う商売の人が何人かいて、江戸の材木商や、伐採する山の持ち主などと交渉しながら早川産の材木を売っていた。

広大な山林から切り出された材木は、江戸城、京都御所、三州矢作橋、水戸藩御用材などに用いられている。競合する木材の産地も多いだろうに、早川の材木が用いられているのは、品質がよいからか、生産量が多いからか、値段が安いのか……。信用できる問屋がいた、あるいは杣の腕が良かったといった理由かもしれない。

意外な名産品としては葉袋の煙草がある。甲州には甲府近辺の竜王や小松など有名な煙草産地があったが、その中でも葉袋産は評判が良かったようだ。^{（注）}

芸をよくたしなみ、遊郭通いなど遊びにも精通していた文人、柳沢淇園^{（注）}（やなぎさわきえん）は、その著作「ひとりね」の中で、日本中のすぐれた煙草の銘柄のひとつに葉袋の煙草を挙げている。

他にも、コウゾ・ミツマタや金などの特産

品があり、早川入りに住む人々はそれらの生産に関わっていた。確かに、楽な暮らしではなかっただろうが、米が取れないからといって決して貧乏一辺倒ではなかったのである。

それどころか、早川の山は、材木や煙草、さらに雨畑の硯石など、全国に名を轟かせる品を生み出すまさに宝の山だったのだ。

【参照史料】
『甲斐国志』卷之十六、卷之百二十三（大日本地誌体系44・48より）
「ひとりね」（『日本古典文学大系』96より）、
『中央大学山村研究会古文書調査報告書Ⅰ』、
斎藤家文書『早川町誌』

（注）「甲斐国志」に「○葉袋 西河内領ニ在ル村名ナリ。煙草ノ色赤ク香氣有リテ烈シ。極メテ上品ナレドモ幽僻ニシテ土地広カラズ。隣村ニ植ル者ハ其ノ品位稍々劣リト云々」という記述がある。

（注）画家の柳里恭（りゆりきよ）は、この淇園である。十六の芸で師範になれる腕前だったという。柳沢吉保の家臣で、甲府にも住んでいたことがある。

浮かび上がる 早川入りの生き生きとした暮らしぶり

北へ南への巻

江戸時代の早川入りの人々は、仕事のためにはかなり積極的に足を伸ばしていることもわかる。

例えば、早川入りの茂兵衛と秀八は、駿州富士郡大宮町（現在の静岡県富士市大宮町）の庄次郎との間に、駿州駿東郡千福村（現在の静岡県裾野市千福）で共同で炭焼をする取り決めを結んでいる。この炭は「御用」の炭というから、幕府が藩に納入するものである。早川の炭焼のノウハウが認められたということだろうか。

野州川俣山（現・栃木県栗山村）の伐採で日用頭（ひようがしら・木材の搬出作業に携わった人のリーダー）は、早川の人であったようだ。^{（注）}早川で鍛えた腕で、栃木までも出かけていっているのである。

また、百姓の与惣治は、農閑期にふるいの張り替えの出稼ぎに出た。行った先は相州・武州（現・神奈川県あたり）。こんな所に足を伸ばしているということは、ふるい張り替えの需要が大きかったのか、与惣治の腕が良かったのか。そして、源一郎という人は江戸馬喰町中田屋から、早川にいる彦左衛門に、商談が成立したという内容の手紙を送っている。手紙からは取引の内容まではわからないのだが、「御用」と書かれているので、幕府か、どこかの藩の仕事と考えられる。彦左衛門は、公共事業を請け負うために営業マンを江戸に送り込んでいたのだろうか。

こういったことから、当時の人々の行動範囲が意外と広がったことがわかる。決して早川入りの中だけでひっそりしていたわけではないのである。

【参照史料】

斎藤家文書、水野家文書、佐野家文書
『中央大学山村研究会古文書調査報告書Ⅰ』



（注）材木の伐採には、伐採を行う杣（そま）と、搬出に携わる日用、そういった工夫の食糧などの荷物を運搬する持子（もちこ）など、多様な人が関わっていた。それらの人々は、早川から野州へ行ったり、木曾や飛騨から早川に来たりと、あちこち移動する人々だったようだ。

箕を編む人々（昭和初期）



「畸人百人一首」に描かれた柳里恭と柳沢淇園 柳沢文庫所

今回の特集にあたり、以下の方々には、史料提供や執筆に際してのアドバイスなどで大変お世話になりました。深く感謝申し上げます。

財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会
斎藤義直（群馬県月夜野町）
佐野淳一（早川町）
白水智（中央学院大学）
中央大学山村研究会
西川広平（山梨県教育委員会）
水野定夫（早川町）
身延町教育委員会
依田順子（身延町）
〈五十音順、敬称略〉

※斎藤家文書は、平成17年10月開館の山梨県立博物館に寄贈される予定です。

5/20~29

重要伝統的建造物群保存地区選定10周年記念 保坂紀夫展・竹に集う赤沢宿



江戸時代の面影を残す赤沢宿。文化庁の重要伝統的建造物群保存地区に選定されて、ちょうど10年が経過しました。これを機会に、もう一度赤沢の魅力を見直し、また今後の可能性を探ろうと、イベントを企画しました。

メインは、竹の芸術家、保坂紀夫氏の作品展。赤沢集落全体を会場にした、一風変わった展示会です。その他にも、法話、民謡、落語、尺八など、イベントも盛りだくさん。若葉のまぶしい季節、ぜひ赤沢宿へお出かけ下さい。

日時／5月20日(金)～5月29日(日) 午前10時～午後5時
※イベント日は午後9時まで、最終日は午後3時まで
会場／赤沢集落内全域(参加費無料)

イベント／20日(金) 法話と赤沢宿の話
21日(土) 落語(東屋夢助、東屋夢蔵)
27日(金) 尺八と十弦ギターの夕べ(岩間恒、相川達也)
28日(土) 早川ウインドアンサンブルと奈良田の民謡(白樺会)
※すべて午後7時から、赤沢公民館にて。内容はあくまでも予定です。

シンポジウム／22日(日)午後2時～ シンポジウム「フィールドミュージアムと地域活性化(仮題)」

駐車場／平常時は集落内まで車でお願い下さい。イベント時は、開始一時間前より角瀬トンネル横の臨時駐車場へお止め下さい。そこから、マイクロバスにて送迎いたします。

食事・宿泊／期間中、集落内でそば屋と喫茶店が営業する予定です。昼食、休憩等にご利用下さい。なお、残念ながら集落内の旅館への宿泊は不可能です。ヴィラ雨畑、ヘルシー美里他、町内の旅館民宿をご利用下さい。

備考／集落入口に案内所を設置します。集落内の駐車場や展示会場の位置等は、そこへお尋ね下さい。会場全体のマップもそこで配布する予定です。



◆保坂紀夫氏プロフィール

山梨県出身。武蔵野美術大学工芸・工業デザイン科卒業。企業でデザイナーとして活躍後、1981年に保坂デザイン研究所を設立。日本の伝統的な竹工芸とデザインの融合を計り、独自の境地を開く。欧米各地で個展を開催し、竹工芸を国際的アートにまで高めた点は高く評価されている。現在、愛知芸術大学非常勤講師、東京芸術大学、武蔵野美術大学特別講師。

2/26-27 やまだらけツアー第7弾 「昔ながらの味噌仕込み会」ご報告！

やまだらけツアー第7弾「昔ながらの味噌仕込み会」。今回の参加者は14名。初の宿泊付きツアーということもあって、県外の方々も多数参加していただきました。

◆昔の味噌仕込みを学ぶ

初日、まずは昔の味噌仕込みの様子を知ってもらおうと、地元の早川俊英さんに解説してもらい早川集落を散策。かつては、近所と共同で一晩かけて味噌に使う大豆を煮たんです。写真は、今も残る巨大な味噌釜を見せてもらっているところ。



◆豆が煮えるまでの楽しいひととき

散策が終わり、夕方からはいよいよ作業。ここからは、黒桂の藤本勝子さん、勝さん親子に来ていただき指導してもらいました。まずは大豆を茹でます。そして、米麹と麦麹を混

ぜる。大豆が煮えるまでは、懇親会。鹿肉の鍋をつきながら、野鳥公園の村田さんが早川に棲む野鳥のスライドを見せてくれました。



◆力の見せ所だよ！しっかり腰を入れて！

翌日は、茹で上がった大豆を、臼と杵を使って潰すところからスタート。なるべく豆が残らないように、細かく潰すのがコツ。体力と根気のいる作業です。途中で麹と塩を入れて再度突き、最後に大きな樽でよくかき混ぜて、味噌仕込みが終了。



仕込んだ味噌は分けて持ち帰り、それぞれの家庭で熟成させます。食卓に上るのは、半年から一年後。きっと美味しい味噌ができていくことでしょう。参加者して下さったみなさん、ありがとうございました。来年、できた味噌を持ち合せて、手前味噌大自慢会を開きましょう！

■読者の声

●豆腐作りの様子が大変丁寧な報告されており、70年前の昔に返った気分になった。寒さの中で石臼で豆腐用の豆を挽く母を連想し、大変懐かしかった。(身延町Mさん)

●豆腐作りの記事を読ませていただき、育ち盛りを過ごした集落(硯島地区)を想い、懐かしさにいっぱいでした。(静岡県Mさん)

■豆腐作りに対して、懐かしかったという声を、多数いただきました。みなさんの大切な原風景を、しっかりと残していけるよう、努力していきます。

■NEXT やまだらけ

次号特集(6月上旬お届け予定)

「早川のお食事処」

「早川に来て、食事するところがないんだよね」。観光客の方々の、そんな声を良く耳にします。しかし、あるんです。実はあるんです、おいしい食事処が。今回は、早川に来たときにぜひ立ち寄りて欲しい店と、食べて欲しいメニューを紹介します！(本当にあるのか不安な編集部ですが、これから頑張って探しますので、お楽しみに！！)

得情報

5月3日、早川中学校運動場にて開かれる、早川町最大のイベント「山菜まつり」。そして上記で紹介した5月20日からの赤沢宿イベントに、やまだらけ編集部が喫茶店をオープンします。もちろん、会員証の提示が「やまだらけを見た」で、恒例の石臼挽きコーヒーを1杯サービスいたします！お越しの際は、ぜひお立ち寄り下さい！！

執筆中は、古文書に登場するいろいろな人に思いを巡らせる日々でした。そこからは、喜んだり苦勞したりしながら暮らしていた先人たちの様子が(推測や想像で補う部分もありますが)リアルに伝わってきます。古文書は、この地に生きた人々の確かな痕跡だと感じました。古文書を守り伝えた歴代の所有者の方に敬意を表し、この地域の宝物を残し、続けていかなければと改めて思いました。

山を覗けば宝の山
やまだらけ

発行元／フィールドミュージアム運営委員会

住所／山梨県南巨摩郡早川町薬袋430 〒409-2727

電話／0556-45-2160 ファクシミリ／0556-45-2268

ホームページ／<http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/fm/>